

ふたかみ文化センター
楽しみ方・遊び方・学び方

博物館のうらがわでは

二上山博物館は日本で初めての旧石器文化をおもに紹介する博物館として開館されました。年に二回の特別展が開かれるほかに、毎日展示されている常設展があります。その常設展示のテーマはみなさんよくご存じの「二上山と三つの石」で古代人が石器に用いたサヌカイトという石や古墳時代の凝灰岩、香芝市の特産の金剛砂などが楽しく、分かりやすく展示されています。

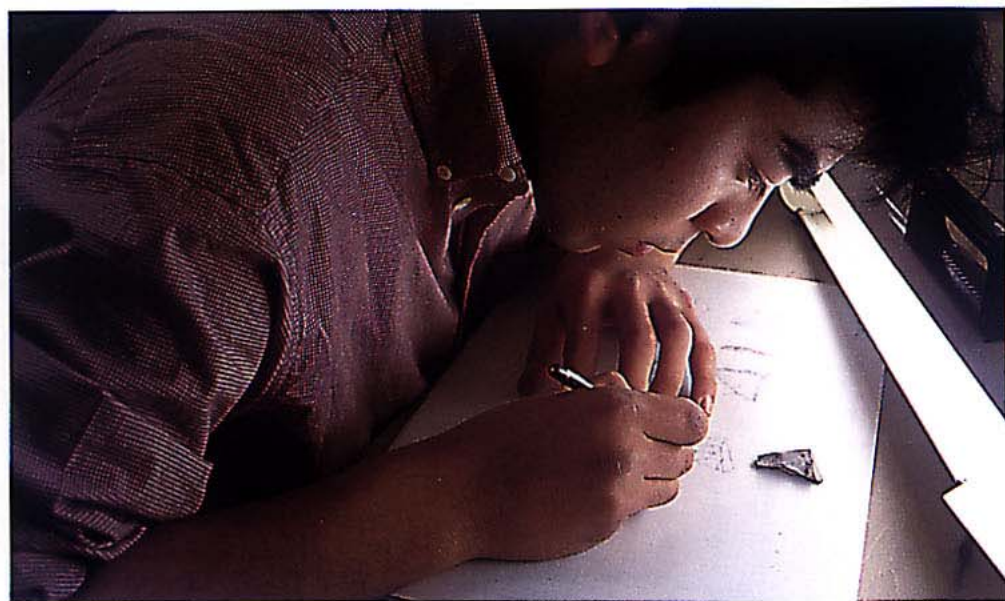


こうした何げなく見える展示も博物館の表に現れない工夫や努力があつてこそです。そこで今回は二上山博物館の裏側、日常活動についてご紹介したいと思います。博物館のスタッフは館長、学芸員あわせて六名、主に考古学の専門家で構成されていますが、仏教美術史を研究している学芸員もいます。これらのスタッフは展覧会やその準備以外にも、日常どんな活動をしているのでしょうか。

大変だが大切な発掘調査

それは発掘調査とその資料整理・研究です。いいかえれば、かれらの活動の大部分はこの二つが占めているといってもよいほどに重要なのです。発掘がなければ、より新しい研究もありませんし、そこから展示も生まれません。また綿密な調査や資料整理がなければ、充実した研究もありません。二上山博物館では、ふだんスタッフの半数が発掘調査に出て、残りの半数が博物館資料の整理や研究、展示準備さらに普及活動に専念しているとのこと。

発掘調査は毎日のように行われています。夏は炎天下にもかかわらず汗まみれになり、冬は吹きさらす寒風の中での土にまみれての作業です。しかし、貴重な発見や素晴らしい出土品があつたときは、そうした苦労も吹き飛んでしまうほどうれしいものだといえます。香芝市での開発にともなう発掘調査は次々とあり、それだけに大変ですが、また新資料の出現が期待されます。



綿密な作業が続く資料の整理



こうして発掘された資料は、博物館の地階にある資料整理室などで研究されます。しかし、その前に出土品はきれいに洗って、こび

りついた土や汚れを取り除きます。石器などは、それから実測されます。また土器には復元作業も待っています。

石器の実測は気の遠くなるような細かい作業です。石の断面をスケールで測って、紙面に写し取っていくのですが、どうやって割ったか、どの順に打ち欠いて石器を作ったのかなどが分かるためには、正確でなければなりません。しかも立体感があるように描かれています。こうして実測できるのは、その石器の形や大きさに

よりますが、一日四〜五個といえます。複雑なものならば一日一個というものもあるそうです。また土器の復元も細かい作業です。小さな断片を集めて壺や皿などの形に仕上げていくのですが、まるでジグソーパズルのようです。違うのは完成図が付いていないこと。ともかく、この資料整理や研究には時間や人手がものすごくかかります。そこから新しい展示が生まれてくるのです。

友の会やボランティアの活動



この資料整理にボランティアの人たちの力が役立っています。「すみれ会」という生涯学習ボランティア活動の一環で、現在二十二名

の女性たちが週一回、博物館に集まり、遺跡の写真整理などを手伝っています。皆さん、香芝市の歴史や風土に興味があって、自分の勉強のためにもなりこの会に参加されたといい、将来は展示案内や説明、発掘調査などもやってみたいとおっしゃっていました。

また、二上山博物館の友の会として「ふたかみ史遊会」が昨年5月に発足しました。平成五年度は四百三十名の会員がいて、年六回の例会が開かれ、講演会やシンポジウムなど積極的な活動が行われています。現地学習会などは県下の史跡などを歩いて行われ、楽しく学習するというまさに香芝遊学を実践しているようです。ぜひ会員となつて、香芝や奈良の歴史に遊ぶ楽しみを味わっていただきたいですね。